
ダンジョンに潜ろうと思います

ボナンザ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダンジョンに潜ろうと思います

【Nコード】

N0100BA

【作者名】

ボナンザ

【あらすじ】

とある宗教の要職を連ねる一族として生まれた主人公は、その生き方に疑問を持ち、日々己の命を燃やすダンジョン探索者に憧れることになる。恵まれたレールを逸脱する事になるが、主人公に後悔はない。しかし主人公はその生まれから、ダンジョン探索者の認可と同時にとある密命を受けることになるのだった。

01話 グインは未だ探索者未満 Vol.01

気合の入れた一閃が肉を切る。

切り跡からは血が飛び散り、地面の上を首がころころと転がった。

「ふう、やっとクリアか……」

薄暗い洞窟の中に、一人の男の声がこだました。

男の名前はグイン。

将来をダンジョン探索で生きていこうと決心した、15歳の少年である。

グインは黒い煙となって消えていくモンスターに目をやった。

今倒したこのモンスターは、このダンジョンに潜むボス。最下層の君臨者だ。

体長はグインの倍、体重はおおよそ数十倍もあっただろう。

しかしグインは、その鍛え抜いた剣技で、一人のこのボスを打ち倒したのだった。

「さて、クリア報酬をいただきましようかね」

グインは血で汚れた剣をぱつと振って、鞘に収める。

グインは息一つついておらず、まだまだ余裕が見えていた。

決してこのボスが弱いわけではない。むしろこのダンジョンを一人でクリアしたグインが異常なのである。

ボスを倒したことにより奥の扉が勝手に開く。

グインは足を進めて入っていく。

そして奥あったのは、赤い宝箱だった。

「なんつーか、こついつのつて一体誰が用意しているんだろうね」
グインはひとり言を呟いて、しゃがみ込み宝箱を開けてみる。
中にあつたのは一振りの剣。
それを見たグインは顔をしかめる。

「また武器かよ……」

これで3連続武器である。

クリア報酬と言えば、そのダンジョンの中でも最高のものが手に入るとされているので、否応にもその期待は高くなる。

しかしもうすでにある程度の装備が揃っているグインにとっては、このような武器は必要なかった。

もちろん今の武器よりも良い物という可能性もあるが、今グインが使っている冥剣『ガクヒ』はこれ以上の難易度のダンジョンで手に入れた一品のため、その可能性は低いのだ。

それよりも特別な消耗品や便利なアイテムの方がグインにとっては嬉しいのである。

グインはしぶしぶと剣を拾い、背中に背負っていた袋に詰め込むことにした。

すると不思議なことに、その袋は体積を増すことなく剣が収められる。

この袋はレア効果の一つである『亜空間収集機能』を備えているため、どれほど荷物を積んでもかさばることがないのだった。

グインはクリア報酬の奥にある、脱出用の泉に身を浸し、ダンジョンを後にした。

宗教都市ブルバニア。

そこはグインが生まれ、育った、世界に名だたる大都市である。宗教という言葉が冠に付いているように、この都市はヤズマ教という宗教の聖都が置かれており、そのため貿易に信者に神官にと、多くの人間が交易し莫大な富が築かれていた。

グインはその街の一角にある、小さな酒場に入っていく。表の看板には木彫りの文字で『トサカ頭のニワトリ亭』と書かれていた。

「いつらしゃい、ってグインか……」

筋骨隆々としたモヒカン頭の店主が、グインを見るなり呟いた。

「おいおいマスター、そりゃないっしょ。これでもきちんとした客だぜ、俺？」

「客ねえ。まあ、笑顔を振りまいて欲しけりゃ、きちんとツケは払うこつたな」

「うげっ、それを言われちゃ返す言葉がなくなっちまう」

グインは笑いながら、バーのカウンターに腰掛ける。

「あー、疲れた疲れた。ひとまずエールと豚の塩漬け一つずつお願いますわ」

「はいはい、どうせ今回もツケなんだから？」

「わかる？」

いつもの軽いやりとり。

グインはこの空気が好きだった。

「今日もダンジョンの方に行ってきたのか？」

「マスターが酒を注ぎながら聞いてくる。」

「うん。もうあのダンジョンならソロでクリアも楽勝になっちゃったよ。」

「へえ。あそこはC級の中でもそれなりに難易度は高い方なんだがな。それをお前みたいなガキンチョがねえ。実力だけは一人前だ。」

「まあね。自画自賛になっちゃうけど、自分でも実際結構なもんだと思うよ。俺ぐらいの年齢であのダンジョンをソロクリアできるのは、世界でもほんの一握りでしょ？」

「まあな、それは認めてやるさ。しかしそのくせ、金払いが悪い。そこさえどうにかなりゃ、俺としても愛想を振りまいてやってもらいたいがな。」

「もく、おっちゃんには悪いと思ってるよ。でも俺の年齢じゃあ、ギルドにはまだ登録できないんだからしょうがないじゃん。おかげで戦利品を捌けなくて、溜まりに溜まっちゃって困ってんだよ。」

ギルドと一口に言っても様々であるが、たいていギルドと言えば『ダンジョンギルド』を指すのが常である。

ダンジョンギルドは世界に点在する数多のダンジョンを統括し、運営するギルドであるが、この世界においては一国に匹敵するほどの権力を持っていた。

そしてそのダンジョン内で手に入った武器は、売買をするならギルドを介在してでしか許されず、個人で販売することは固く禁じられている。

そのためゲインは、手に入れたものは膨大なれど、金に変えることはできていなかった。

「あれか。まだ親父さんが許してくれないのか。」

マスターは注いだばかりのぬるったるいエールを、ゲインの前に

置きながら聞いてみる。

グインはそれを、ぐいっと一気にあおる。

「そつ。親父のやつ頭が固くてさあ、身内からダンジョン探索者のような下賤な者を出すわけにはいかん！　つてそればっか。まったくいつの時代だよって話さ。さつさと16になって、独り立ちしてえよ」

16歳未満がギルドに登録するには、保護者、もしくは後見人の許可が必要だ。

おかげでグインは今までずっと、モグリのダンジョン探索者として行動している。

「探索者が下賤ねえ。お前の親父さんって結構な身分なものなのか？」

「うっ……それは、内緒」

「ふっん、まあいいがね」

余計な詮索はしないとばかりに、マスターは豚の切り身の乗った皿を出した。

豚の肝の塩漬けであるが、これに胡椒がたっぷりとかかっており、キツイ塩味がこれまた酒に合うのだ。

グインはぺろりと一切れ飲み込んだ。

「うっめ」

香ばしい匂いと、弾ける辛味が合わさって、口の中がひりひりする。

それを癒すように酒をぐびぐびと飲み、息を吐く。

「あゝ、最っ高。これ以上うまいもんなんて、ぜってーこの世に存在しないだろ」

「そう言ってもらえるとお世辞でもありがたいがね」

「いやいやマジだって。最高だよこのコンボは」

そうしてゲインは、もう一切れの豚の塩漬けに手を伸ばしながら呟いた。

「しかし、こうしてこれが食えるのも、あと一ヶ月。そう思うと、16になるのも良いことばかりじゃねえなあ」

遠くを見つめ、寂しそうな瞳をしたゲインを、マスターはグラスを拭きながら声をかける。

「確か来月が誕生日だったっけか？」

「ん、そつ。16になるから、晴れて俺も一人前の探索者になれるんだけどね。でもしたらこの町を出なきゃいけない」

「ん？ そうなのか？ 別にこの町を根城にしてもよかるうもんに「いやいや、駄目だよそんなの。やつぱ旅をし、世界中のダンジョンを制覇してこそその探索者さ。家住なんて、三下のやることだよ」

ダンジョンは世界各地に点在する。

その中には様々なダンジョンを探索する流れの者もいれば、一つのダンジョンを縄張りにする定住者もいた。

しかしその実後者の方は、基本的に実力が劣るとして下に見られることが多いのだ。

若いゲインにとって、それは到底認められることではない。

「ふん。そんなもんかねえ」

マスターは呆れるように呟いた。

「まあ実際は、俺はそういうのも有りかなあ、とは思っけどね。安定を求めるのは人間の性だろうし。ただ若いうちは挑戦してみるべきだと思っわけよ、やっぱ」

「ほう、言っじゃないか」

「突っ走ってばっかじゃ、どっかで息切れするのは目に見える。そんぐらいはわかってるさ。だから俺は、体力の有り余ってる今、やりきりたいんだ」

満足そうに呟くグインを見て、マスターはにやりと笑った。

「とか何とか言って、実はこの町で暮らすと、親と顔を合わせることになるから嫌なんだろ？」

グインは渋い顔をする。

「うゝ、まあ、それもあるけど……」

「ふん。親の期待を裏切っていたたまれないんだろうが、どこかで割りきらんにゃ、一生呵責となって追いつがるぞ。それが剣の鈍りにつながつて、命を落す事になるかもしれん。心にはっきりと白黒はつけておくようにな」

グインは舌打ちをした。

「何だよ、説教かよ」

「ああその通り。これは説教だ。そもそもお前みたいな年頃が、説教から逃げることなんてありえないんだよ。まあ悪いことは言わないから、きちんと出発前にけじめはきちんとつけとけ。そのまま黙ってだと、きつと後悔することになる」

グインはテーブルに頬杖をつき、不貞腐れたように呟く。

「けじめねえ……」

するとマスターは、テーブルの下から、何やらノートを取り出した。

そしてペラペラとめくり、あるページのところに来ると、グインに見やすいように反転させて差し出す。

「これがお前の貯めたツケの総額な。これをきっちり払い終えるのも、けじめの一つ」

ページを見たグインは驚いた声を上げた。

「ええっ、12700オース!? それってマジで!?!」

12700オース。

それは一般家庭の一ヶ月の生活費に相当する金額だった。

「ああマジだ。でもこれでも結構おまけしてやってんだぜ? かわいい弟分のものとしてな」

「うえ〜、かわいい弟分っていうなら、全部タダにしてくれてもいいのに……」

「駄目だ。きつちりと責任は果たす。それは大人として当然の義務だからな。甘やかすわけにいかん」

グインはテーブルに突っ伏した。

「また説教かよお……わかったよ、払いますっ」

グインは力なくそう答えた。
マスターは満足そうに頷いた。

01話 グインは未だ探索者未満 Vol.02

『トサカ頭のニワトリ亭』を後にしたグインは、そのまま路地を抜け、人気のない通りまでやってきた。

そこでグインは、まるでこれからお菓子をつまみ食いする子どものように、何度も辺りを見回した。バレないように、そーっと、そーっと、頭を動かし確認する。

そして辺りに気配がないことを確信すると、さらに狭い路地へと入っていく。

そこは人一人がどうにか通れるほどの細さだった。普段通いなれた人が見ても、ここに道なんてあったかどうか覚えていないに違いない。

しかしそんな細い路地は、あまり見られたくない行動をするには、もってこいの場所とも言えた。

グインは道の中頃に来ると、足を止めた。

そしておもむろに袋の中に手を突っ込み、中から一着の服を取り出した。

その服は、青を基調とし、潔白を表す白の十字模様が正中を射抜くように描かれている。一瞥するだけで、高貴さ、清らかさ、健やかさをイメージさせるそのフォルム。それはヤズマ教の神官が平時に着す装束だ。

グインは鎧を脱ぎ、取り出した装束を丁寧に羽織っていく。

頭を出して、袖を通す。その度に印象がガラリと変わり、まるで別人になっていく。

グインは服を整え、髪を正す。そして残った鎧を隠すように袋に詰める。

いつの間にやら、一介の冒険者だったものは、どこに出しても恥ずかしくない高貴な若い神官へと変貌していた。

グインはその姿で路地から出ると、胸をただし、歩き出す。町を闊歩するその姿は、凜々しく、人目を引いてやまなかった。ヴァシユミルツ家の次男。教会の将来を担うもの。その異名に相応しい、堂々とした立ち振る舞いだ。

しかしただひとつ、背負われた大きな袋が清廉な格好とどこにもちぐはぐで、それを見た町民は首を捻って不思議がった。

「ただいま」

グインはヤズマ教会の大手門を抜け、教内にある私有地へと入り、家の扉を開けるなり呟いた。

ひんやりとした大理石の玄関は、どうにも人を迎えるには冷たすぎる造りだ。

返事は当然のように返ってこない。

まあこんな小さな声では、誰も気づくはずがないのも当然だが。

グインはそのまま、自分の部屋へと直行する。

父親や兄貴は仕事でいないだろうが、妹やその他の住み込みの信徒と顔を合わすのが嫌だったのだ。

階段を登り、廊下のつきあたりにある端の一角。机とベッドと本棚と衣装掛け。それだけしかない簡素な室内の、唯一自分だけのテリトリー。

グインはそこに逃げこむと、袋をドアの重し代わりに立てかけて、そのままベッドに飛び込んだ。

体は弾力に跳ね返されてポフンとはずむ。やがてずぶずぶと沈んでいく。

ベッドの程よい柔らかさが心地よく、さらに食事をした直後というところもあり、少しばかり眠くなる。

しかしグインはそれを気合でははじくと、神官服を脱ぎ捨て、い

きなりベッドの上で筋トレを始める。

グインにとって筋トレは日課だった。

トレーニングを初めて以来、一日たりとも休んだことはない。

腹筋背筋腕立てと、定番のメニューを体が吊るまで繰り返す、逆立ちに素振りスクワットなどで体が悲鳴を上げるまで傷めつける。

今朝ダンジョンをクリアしたばかりであるが、1日の手抜きは衰退の元と、ひたすらに励む。

そうして何時間もトレーニングを続け、体中が汗だくになったころ、階段を上がる足音がグインの耳に届いた。

次いでドアが開き、厳つい顔がそこから覗く。

太く吊り上がった眉に、大きな鷹鼻。そして顔を覆うあご髭。

グインの父親のヨアヒムだった。

重しがわりにしていた袋は、ほんの数秒の防波堤にしかならなかったようだ。

「休みの日にトレーニングか。精が出るな」

ヨアヒムはグインを見るなりそう言った。

しかしこのトレーニング、これは別に父親のためにやっているわけではない。

むしろグインの身勝手な目的、家を出て探索者になるためにやっているのである。

そういう背景があるため、グインには今のヨアヒムの言葉が嫌味に聞こえてしまう。

グインはトレーニングをピタリと止めた。

「父さん。俺、16になったら家を出て、探索者になるから」

前にも何度か口に出したことはあったが、はっきりと宣言したの

は、これが初めてであった。

言ってやったとグインは思う。

しかしこれでいいのだ。いつかは言わなければならないことなのだから。

するとヨアヒムは眉を寄せた。

「前々から確かにそんなことを言っていたが……本気なのか？ お前には、教会騎士団長の道を用意しているのだぞ？」

教会騎士団長。

それは騎士団の花であった。

団長になるには実力はもちろんのこと、出生や信仰心、さらには有力な後ろ盾が必要になる。

そんな後ろ盾に、ヨアヒムは立とうというのであった。

グインの属するヴァシユミルツ家には、それだけの力があつた。

基本的に派閥で固まる教会勢力の中において、ヴァシユミルツ家は、多くの血縁者を有するのだ。

それにはちよつとした理由がある。

聖職者は普通妻帯しない。それは欲を断ち、修練を経て、神に仕えるためだ。欲を耐えずして聖職とどうして名乗れようか。それは価値観として当然のこととされている。

しかし何事にも例外がある。

それがヴァシユミルツ家である。

ヴァシユミルツ家の役割は、ト占（ぼくせん）だ。

啓示を占い、それが吉か凶かを判断する。

しかしこの、神の啓示をルールに則つて判断するこの職務は、天啓を具体化するという事に等しかった。

これは統治において役立つが、そもそも恐れ多いことなのだ。

神の意志を人の手で判断しようというのである。禁忌とされてもおかしくない。

為政者には正当性が求められた。誰でも行えるものではなく、許された者だけが代弁できるとして、理由付けが必要となったのだ。相伝では足りない。となれば血伝だ。

こうしてヴァシユミルツ家は、教会内において唯一、血を残すことが許された。

そんなト（ぼく）祭外司教というその階位は、法王と3人の枢機卿に次ぐ位置とされる。

教会に影響力を持つとうとして、外戚には歴代王族、有力貴族が名を連ねてもいる。

グインはそんな家に生まれたのだ。

けれどもグインにとって、そんなことはもうどうでもよい。

「悪いけど、俺は本気さ。もう決めたことだ。父さんの期待に答えられないのは申し訳なく思う。でも自分の考えを曲げるつもりはない」

家を継ぐのは兄がいる。

そして兄はそれに邁進している。

ならばもう役目は果たせているはずだ。

自分の夢を追いかけても問題はない。

グインはそう考えている。

「はあ。お前は……恵まれたレールを投げ出すというのか……」

ヨアヒムは重い息を吐く。

「確かに、恵まれていると思うさ。でも俺は探索者に憧れちゃったんだ。人生が2度あるんなら父さんの言うことも聞くかもしれない。でも人生は、1度しかないんだ」

「しかしな、グイン。探索者とは厳しい職業だぞ？ 平気でコロコ

口と命を落とす。お前は甘く見てないか？」

「んなことねーよ。ってかもう現場も知ってるし。探索者になって成功できるのは一握りだし、痛く苦しい思いもしなきゃいけない。五体満足で引退できる確率なんて奇跡に等しいし、怪我の原因がそこらに転がってる。そんなことわかってる。でも、俺は夢見ちまっただ。だからもう、どうしようもねーんだ」

グインの言葉にヨアヒムは言葉を詰まらせたようだ。

ヨアヒムは考え込んだように動かない。

「父さんには悪いとは思ってるよ、期待に答えられなくて。でも、俺は決めたんだ」

するとヨアヒムはゆっくりと口を開く。

「しょうがないか……。私としてはあまり望まないのだが……」

何か考えがあるような台詞だった。

ヨアヒムはグインに向き直る。

「グイン。明日の正午に法王猊下の執務室に顔を出しなさい」

「は？ 法王様の？」

グインは耳を疑った。

何故ここで法王猊下の名前が出るのか。

法王は教会においての最高権力。神に次いで絶対の存在だ。

可能性としては、出立を止めるように言われることだが、しかしこんな私的な問題に、猊下が口を出すとも思えない。

けれどももし法王猊下の命令となれば、私心など押し殺すしかなくなってしまふ。

「何、心配するな。別にお前の旅立ちを止めようというわけではない。むしろ逆だ。法王猊下直々に、お声をかけてくださるうというのだ」

しかし法王猊下が直接である。

グインにはいまいち信じられない。

「いや、わけがわかんないんだけど？ そんなオオゴトなわけ、これ？」

「こら、その言葉遣いは不敬が過ぎるぞ。きちんと言葉を選ぶように。まあ明日来ればわかる。今言えるのはそれだけだ」

そう言つとヨアヒムは背を向ける。

「それと、このことは他言しないようにな」

そして一言付け加えると、そのまま去っていった。

グインはその背中に声をかけることもままならず、部屋にはぽつんと立ち尽くす。

まったくわけがわからない。

「318……319……」

ひとまず筋トレをしながら考えようと思い、スクワットを開始した。

01話 グインは未だ探索者未満 Vol.03

クラウドス13世法王猊下は、ヤズマ教徒を束ねる人物である。

その人柄は温和で情け深く、治世においてもその温情が垣間見られる。そのため人気は、内外を問わず高かった。おかげで在歴して以来、教会は安定した発展を続けている。

しかし法王猊下の御年はすでに88。これは、いつお隠れになってもおかしくない年齢だ。

そのせいか近年は影響力に陰りが見られ、次期法王の座を狙った内部抗争が燻っていた。

「失礼します」

とはいえグインにとっては雲上人。

久しぶりの対面に緊張した。

「おお。グインくん。よく来てくれたね」

グインが重い扉を開くと、私室でくつろいでいたクラウドス法王は、笑顔で迎えてくれた。

垂れ下がった白い眉毛に、大きな丸鼻。柔らかな人柄がよく表れている顔つきだ。

今は昼休憩の時間のため、椅子に腰掛けワインを嗜んでいたようだ。

しかし何故か向かい側に、グインの父であるヨアヒムも一緒に座っている。

てつきり一対一の対面だと思っていたため、グインは意表をつかれてしまった。

「あれ、父さん？ 何でいるのさ？」

「気にするな。ほら、こっちに来て座りなさい」

ヨアヒムは空いている席の一つに、ゲインを誘導する。

ゲインが席に着くと、クラウド法王は直々にワインを注いでくれた。

「ゲインくん。間違えるくらいに大きくなったね。うんうん、喜ばしいことだ」

クラウド法王は、柔らかく微笑む。

教会内で生まれ育ったゲインにとっては、クラウド法王はよく知った人物である。

生まれた時から法王位に着いており、清廉潔白で優しく、身内のように目をかけていただいた恩がある。

「ありがとうございます、猊下」

ゲインは丁寧な頭を下げる。

「ところでゲインくん。君は、家を出ようとしているんだってね？」

するとクラウド法王はいきなり話を切り出した。

予想はしていたがあまりの突然の台詞に、ゲインは少々面食らう。もしかしたら、本当にクラウド法王が、直接探索者になることを反対するかもしれない。

しかしそうなったら面倒事だ。家と違い、個人的に崇拜する人物なのだ。おいそれと裏切るわけにはいかなかった。

すると横からヨアヒムが口を出す。

「安心しろ、グイン。前にも言ったが、別にお前を引きとめようというわけではない」

しかしそれだけで納得できるグインではない。

じゃあ呼んだ理由は何なのか。

法王直々である。ただ事であるはずがない。

グインは気を引き締める。

「グインくん。探索者、という職業を私はよく知らないんだがね。

あれはダンジョンギルドを通してダンジョンに挑み、物資を持ち帰ることによって生活する。という認識でいいのかね？」

「はい。概ねその通りです。他にもギルドが請け負う護衛の仕事や雑用なんかもありますが。一番の収益は、やっぱりダンジョン探索です」

「ふむ、なるほどなるほど」

クラウドは法王はこくこくと頷く。

「それでグインくんは、その探索者になりたいというわけだ。まあ若くて才能のあるグインくんか。きつとすぐにでも頭角を現すだろう。一流の探索者の話は、畑が違う私の耳にも入る。何でも智勇を揃えた一騎当千の強者ばかりだというじゃないか」

ダンジョン探索者には、その実力と経歴によってランク分けされる。階級はダンジョンランクと同じくA～Fであるが、中には特A級と呼ばれる怪物たちもいた。

「まあ、僕がそのレベルに慣れるかはわかりませんが、やるからには歴史に名を残すほどの超一流になりたいとは思ってます」

「はっはっはっ。それは頼もしい。正直な所グインくんが騎士団を継いでくれないとわかった時は落胆したが、そんな夢を持っているのなら、聖職者として応援しないわけにはいかないな。励みなさい、グインくん」

「はい。ありがとうございます」

そこまでは本当にただの激励だった。

「そこでグインよ。お前に一つ頼みがある」

本題に入るのか、ヨアヒムが話を切り出した。

「うん。聞くよ」

「うむ。しかしこれは、頼みと言うよりは任務になるぞ。ところでグインも、ダンジョンギルドが、小麦商ギルドや染物ギルドを超える世界最大のギルドということは知っているな？」

グインはもちろんと頷いた。

「ダンジョンギルドの持っている資金力やパイプの太さは、下手な王族よりも上回るってね。そんな子どもでも知ってるよ」

「うむ、そうだ。ギルドはでかい。我々教会を脅かすほどにな」

きな臭い話に、グインは眉を寄せ、顎に手を当てる。

「何？ ギルドが俺らヤズマ教徒に対して、何かしようともしているわけ？」

「残念なことだがその通りだ。だが目的までは、まだわかっていない。事の発端は、3ヶ月ほど前、とある一部の教会内勢力が有権者たちに資金をばらまいたことだ。まあこれ自体はよくある話。しか

「ここで問題になったのは、そのばらまいた金額が低く見積もっても、2億オースを超えていたということだ」

「はあっ！？ 2億オース！？」

2億というと、神殿をまるまる改築できるほどの金額だ。

普通ばらまきというと数十万から数百万が相場である。

桁が2つほど違っている。

「ばらまき先は各商会の重鎮や、貴族連中に向けている。これは外部からの支持を欲していることだろう。しかし、ただのばらまきでこの金額ということはありえない。金の出所も含め、絶対に何かの大きな企てがあるはずだ。そこを我々は調査した。各地に点在している信用できる神父や機関、その他もろもろの関係者を動員してな。結果、どうやらその金の元は、ダンジョンギルドからのものである可能性に行き着いた」

「ダンジョンギルドが教会に、か。それはきな臭い話だね。でもさ、ギルドはどうやって教会内に金を入れたわけさ？」

「それは簡単。寄付という方法だ」

「あっ、そうか。なるほど」

寄付金となれば、個人、組織を問わず、誰でも簡単に教会に出資できる。

寄付とは善意の行為であり、見返りを求めてはいけませんが、金額が多かれ少なかれ教会内の殆どの者が謝礼と受けている。

そのため、個人で使ったとしてもおいそれと非難できない。

下手な追求は、教会構造のやぶ蛇をつつくことになりかねないのだ。

「えっと。そのばらまいた張本人ってのはわかってるんだよね？」

「ああ。それが……ジューリドット浄聖枢機卿だったんだ」

「ええっ？ 浄聖枢機卿？ えっと、言っちゃ悪いけど、あの堅物の？ 嘘でしょ。あの人って、ヤズマ教第一、って感じで、ダンジヨングルドなんかと最も遠い位置にいると思うんだけど……」

グインの発言に、クラウス法王がくすりと笑う。

どうやらグインの人物評が面白かったようだ。

ヨアヒムも唇の端を上げる。

「まあ言わんこともわかるけどな。確かにあの人はそういう性格ではないな。でも、逆に考えてみると恐ろしいことだと思わないか？ あのジューリドット浄聖枢機卿の考えを操り、ヤズマ教に関与しようというほどの野心滾る知恵者が背後にいるということだぞ？」

「うーん。まあ、そういう考え方もできるっちゃできるけど……」

「とりあえず、相当な難敵だと考えたほうがよい。下方修正はいくらでもできるからな。今はただ、相手の狙いを知ることだ。一体ヤズマ教に関わって、どういう事を成し遂げたいのか。征服か、協調か、それとももっと別の何かか。ギルドと言っても、その中の一部の独断なのか、総意なのか。まあようするに、情報がかき集める必要があるというわけさ。ジューリドット浄聖枢機卿も、一体どういう考えでダンジヨングルドなどから寄付を受けたのか。あの人のことだから、きっとそれが教会のためになると思ったのだろう。とにかく何でも情報がある」

ヨアヒムは手を広げ、椅子の背もたれに体重を預ける。

よく見てみると眼の下にくまが出来ており、少し疲れが溜まっているようだった。

「えっと、じゃあ父さんは、俺がギルドに潜入して、このことを調べてこいっていいことかい？」

話の内容から、そういうことだろうと推測する。
しかしヨアヒムは、首を横に振った。

「違う違う。お前はこれからギルドに登録して探索者になろうって言うんだろ？ たかが一介の新人探索者が、これほど大きなことに首を突っ込む力があると思うか？ ギルド支部の職員として働くんならわかるが、それに使われる探索者程度じゃあ内情を探るなんてとても無理だ」

その台詞にグインはむっとした。

「何だよ。じゃあ俺に任務って、一体何しろってんだよ」
「まあ聞け。今の話はな、ギルドに入ろうっていうお前のために、万が一の事を考えて教えておいたんだ。もしかしたら教会勢力の手先と勘違いされて、巻き込まれるかもしれないからな。親心っていうやつさ。まあそれはないと思うが、何らかの情報をお前が掴むかもしれない。その可能性も一応かけているとは言っておこう。だが、お前の任務はもっと別のことだ」

すると、今まで黙って話を聞いていたクラウドが動き出し、その懐から小さな宝石を取り出した。

内部に複雑な文様が描かれていた、真紅の色をした爪の先ほどの宝石だった。

グインはそれを一目見た瞬間から、目を丸くする。

「こ、これは……法王結晶石、ですか!？」

法王結晶石とは、祝福を受けた法王自身が血を流し魔力を込め結晶化させる神秘の秘宝だ。

その製造工程から、決して量産出来ず複製不可能なため、お目に

かかることはほとんどない。

さらにはその特徴として、内部に描かれた文様がその効力と身分を示す。

クラウス法王はそれをグインに渡し、言う。

「中に描かれているのは、ヤズマ教の象徴である聖獣ヤズマと私の名前を混じえたものだよ。これを掲げて君が聖典の詔を告げれば、術式が発動し聖域が展開する。そうすればどんな場所でも、身分を証明することができるはずだ。で、グインくんにはこれを持って、私の代わりに世界中のヤズマ教徒の巡察をして欲しいんだ」

予想以上の大役だった。

グインは言った意味が理解できず、ぽかんと口を開けてしまう。それを見たヨアヒムが、グインの頭をぽんと叩いた。

「こら、きちんと返事をせんか」

そう言われて正気を取り戻したグインは、慌てた口調で言葉を返す。

「えっ、あの。それって法王猊下の代役を、俺が、つてことですか？」

「うん。そういうことだね。本当は私自身が見てまわることが一番なのかも知れないけども、現実はそのいかないからね。それに私が出向くとなれば、自然とオオゴトになってしまって、教徒の素の性格、というものが判断できないんだ。だから信頼できる、グインくんに頼みたいんだよ」

「えっと……僕に地方などの教徒を裁け、というふうにも聞こえるんですが」

「必要があればそうしてもらって構わない。もちろん普段は、グイ

ンくんが見た教徒の、特に聖職者の実態を手紙にしてくれれば十分だよ。でも時には、現場の判断として強権を必要するときもあるだろう。その時には、この結晶石を遠慮なく使って欲しい」

グインは椅子の底に腰を落とし、大きく唸る。

信じられないような権力だった。

自分の機嫌次第で地方の神官を破滅にできるのだ。

悪用すれば、接待を強要することも可能である。

「あの、こんなの本当に……若輩者の僕でいいんですか？」

「うん。グインくんは自分が自分で思っているよりも、優秀だよ。

何より激しい飢えを知らない。だからこそ、安心してこういう仕事
が任せられる」

「そういもんですか……」

「まあ本当は、こういう役職を作らないで済むのが一番なんだけどね。最近はどうにも、遠くの神官が行う悪い噂も聞こえてきて、対策が必要だと思っていたところなんだ。私の力不足の面も大きいね、これは」

クラウドは法王は、皺だらけの手を重ねる。

老いが痛々しいほどに現れている。

「そんな。クラウドは下が無理なら、どんな歴史上の人物だって無理ですよ。こんなに長い間ヤズマ教を担ったのは、今の下下くらいなんですから」

グインは必死にフォローする。

しかしそれは本心である。

「ありがとう、グインくん。でもこれは事実なんだ。ホント老いと

はどうしようもないね。でも私は諦めるわけじゃないよ。きっと次世代に、負債のない広い自由を残してみせるつもりだ」

そう言っただけでクラウドはグインの手を包み込んだ。

「夢を追いかけられる若者は美しい。でも、グインくんの力の一部でいいから貸して欲しいんだ。古く歴史あるものを守るため、そしてそれに縋って生きている者たちのため。どうだろうか、グインくん」

グインに迷いなどない。

自分の尊敬する人にここまで期待されておいて、断る理由など何もない。

「僕でよければ、やらせてもらいます」

グインの強い返事に、クラウドは法王はにっこりと微笑んだ。

「ありがとう。グインくん。君はこれから、法王直属の地方巡察事務官として行動することになる。心配はしてないが、立場に正しい行いを心がけるように気をつけてね。使用品としては、法王結晶石認可委任紋章を給付します。緊急時に使ってください」

世間には公表しない、裏方仕事の任命式が、この場で簡潔に行われた。

グインの手の中の結晶石が、小さく光り輝いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0100ba/>

ダンジョンに潜ろうと思います

2012年1月4日11時49分発行